

1 単元について

この単元では、『華岡青洲、ドクター下間、おじいさん』『南方熊楠、吉川先生、松下さん』の願いにせまらせたいと考えた。生きる時代は違っても、社会の中で社会とかわりながら、自分の願いを実現させるために精一杯生きる姿は、共通に価値あるものとしてとらえることができる。

華岡青洲では、同じ医者である青洲とドクター下間（現役ドクター）でも願いを実現させるために取る方法は違う。青洲の願いにせまるためには、青洲が生きた社会を知り、その社会の問題の中で、自分の願いを実現するためにどのように考え、行動したかということにさぐった。このときには、当時の社会体制、人々の暮らしを理解することも必要になり、江戸時代の武家社会や庶民の暮らしにも目を向けた。また、ドクター下間の願いにせまるためにも現代の社会を知り、現代の社会問題をみる目が必要になり、子どもたちは、ニュース番組や新聞、専門書、インターネットなどで情報収集に力が入った。そして、自分たちが得たことを人に伝えたいという気持ちがあらわれ、伝える方法として『劇』を選び、伝える場所として『青洲祭り』を選んだ。青洲の願いを劇化することで、子どもの思いは達成され、同時に青洲を見る目や青洲の生きた時代や社会をみる目が具体的になり、教材がより子どもたちに近づいたと思っている。

南方熊楠では、熊楠の研究したこと、人柄を物語るエピソードなどを手がかりに学習を進め、熊楠の研究をしている吉川先生や和歌山絵本の会の松下さんの助けを得て、学習を進めた。熊楠の願いにせまるために、熊楠が研究を続けてこれた理由を出し合い、人間がひとつのことを追求し続ける意思やエネルギーの強さが必要なことを知った。そして、後世に業績とよばれるものが残るということは、そのことにかかわった人々が影響していることに気づいた。また、熊楠の研究者としての魅力だけではなく、熊楠とかかわる人々の様子から、熊楠の人間としての魅力にもせまった。「粘菌の研究がしたい」「天下の男と言われたい」という熊楠の気持ちと「熊楠に研究を続けさせたい」と思う熊楠の魅力にひかれた人々の援助が熊楠の業績を支えたという思いをもった。

子どもたちに人の願いにせまらせるためには、その人が生きる社会をみることができるようにしない。人は願いをもち、ねがいを実現する方法を社会とのかかわりの中で模索していることに気づかせたいと考え、学習を進めた。これらの学習活動で、人がよりよく生きるためには、人とかかわりが大きく影響しているということに気づいた。これからも、子どもたち自身が自分のあり方を考えるときも、社会とのかかわりの中で自分を意識し、よりよく生きようと努力できる人間に成長することを願っている。

2 実践の考察

現在、あるいは過去の社会において、よりよく生きようとする人々と出会い、自分のあり方を考える。

- 社会や文化の発展に寄与した先人に関心をもち、その人の業績や願いにせまる。
- 先人やその業績に興味関心をもち、深くかかわっていこうとしている人たちに出会い、その人たちから先人たちのことを学ぶ。同時にその人自身の生き方についても学ぶ。
- 先人たちの願い（よりよく生きたい）は、現在の自分たちと同じであるということに気づき、現在の自分の生活を見つめ直す。また現在の社会が抱えている問題を見つける力を身につける。

【 華 岡 青 洲 】・・・授業記録

青洲に興味をもった子どもたちは、青洲にかかわることを調べ始めた。子どもたちが教材に歩み寄ろうとして学習を進めるので、教材を子どもたちに近づけるための教師の支援として、現在、資料館として復元され残っている春林軒（青洲記念館）を見学するという活動も取り入れた。それだけでなく青洲の業績を伝えたいと願い、それをライフワークにしているおじいさんとも出会

った。子どもたちは、おじいさんがなぜここまで青洲のことにこだわっているのか、青洲のどこにそんな魅力があるのかと目の前のおじいさんの姿を通して青洲を見ようとした。ドクター下間（現役のドクター）との出会いでは、現在でも生きている青洲の業績や願いを現役ドクターから話を聞くことで、子どもたちにも身近に感じ取らせ、現在の医者への願いや医療に関する課題を知る機会にしたいと考えた。おじいさんやドクター下間とのかかわりが深まるにつれて、青洲や青洲が生きた時代が子どもたちに近づき、自分たちが学習したことを「大人に伝えたい」という気持ちをもち始めた子どもたちであった。

●これからどうしたいと思っているの？【調べたことを何らかの方法で伝えたい】

●誰に伝えたいと思っているの？【一般の人、お家の人、おじいさん、ドクター下間、学校のみんな】

○青洲のことを一番に一般の大人に伝えたいと思っているということから、あまり知られていない和歌山の先人、青洲のことを一般の人に知ってもらいたいという思いからであると考えます。
○おじいさんやドクター下間に伝えたいというのは、お世話になったお礼の気持ちからであると考えたい。
○学校のみんなに伝えたいという中では、自分たちの学習していることは、1年生には理解することは難しいと考えている子どもが多いようだ。

●どのような方法で伝えるのか？【劇をする、絵本を作る、壁新聞に書いてまとめる、が出された】

しかし、「劇はしたくない」という意見が数人から出された。「みんなでするのであれば、劇がいいのではないか」という意見がだされたが対立したままで終わった。

この話し合いから読み取れることは、子どもたちがみんなで協力しながら、誰かに伝えたい。伝える内容については、大人が相手でも納得してもらえたり、新しい知識を得てもらえるような、歯ごたえのある内容のものにしたいと考えているということである。

●いつ、どこで伝えるか？

『大人（？）の人に伝えたい』という気持ちは、ほとんどの子どもが考えていた。しかし、伝える方法では、「劇をしたくない」と強く言う子どもが数人いたので、まずは「いつ伝える？どこで伝える？」と目先を変えて考えた。

・12月25日・・・クリスマスの日

《 反論 》2学期も青洲の勉強をしていたら、ほかの人のことが勉強できない

・10月23日 青洲誕生日 ・10月 2日 青洲命日 ・10月13日・・・青洲『全身麻酔に成功』

《 反論 》10月23日だったら、遅いから10月2日がいいと思う

伝える日を青洲の誕生日、命日、乳癌手術成功の日などを候補に上げたことについては、チョッとホッとした。そこで、去年、青洲の里で行われた青洲祭りのパンフレットを出し、『青洲祭り』が10月に行われているということを子どもたちに紹介した。今年の青洲祭りは10月5日（日）に予定されている。

●青洲の何を伝えたい？

・青洲のすごいところを伝えたい

《 本時の目標 》

青洲の業績の中で、自分が伝えたいこと、伝えるべきことを意識しながら考え合う

青洲のすごいところを話し合う中で、青洲の生き方や願いを追求する

①医学の発展のためにつくしたいと思った

- ・全身麻酔で乳がんの手術に成功した
- ・麻酔薬を作りたいと思った
- ・通仙散をつくった
- ・春林軒をつくって、弟子をとり、医学を広めた

②妻や母や姉妹が青洲を助けた

- ・妻や母が実験台になった
- ・妻や母の願い
青洲にひとりでも多くの人々を助けてもらいたい

③富貴栄達を望まない

- ・青洲が門人たちに贈った四行漢詩
- ・お金儲けを考えない
- ・貧しい人の病氣も治した
- ・侍医になることを断った

④侍医になることを断り、地元の人を助けたいと願いでた

- ・侍医になれば、お金をもらえる
- ・出世する
- ・もっと研究できる

●青洲のすごいを②と考えているSくんが、世界栄誉館に飾られている青洲の絵を出して、説明を始める

「栄誉館に飾られている絵には、青洲と母と妻が描かれてあるから、すごいは三人とも同じなん
とちがうかなあー」・・・S

「でも、手術をしたのは青洲だから、青洲がすごい」

「妻や母が実験台にならなかったら、手術は成功していない」

「青洲は、自分の妻が死ぬのを覚悟で、手術に踏み切ったのだから、すごい」・・・S

「加恵さんがウンと言わなかったら、手術はできていない」

「ぼくだったら、犬や猫でも実験に使うのは怖いけど、青洲は必死だったと思うし、その気持ちを
加恵さんは分かっていたから、進んで、実験台になった」

「わたしがもし、加恵さんだったら、実験台になったかもしれへん？青洲が生きていた時代やっ
たらやで。今やったら・・・わからん！」

「わたしは、こわくてできないと思うけど、もし加恵さんだったら、やってるかもしれへんかな？」

「先生、青洲のお母さんやったら、どう？」・・・S

「・・・多分、お母さんは実験台になったと思う」・・・Teacher

「先生は、残りの人生少ないからなれると思うけど」

「ぼくだったら、もしかしたら、お金持ちになりたいから実験をして、成功したらお金をたくさ
んもらえるから、他人に頼んで、お金を渡して実験台になってもらう」

「それは、ダメだと思う」

「今、薬とか作るのに、いろんな実験してるけど、お金もらってアルバイトで実験台してるって、
聞いたことがある」

「ぼくが医者だったら、自分の家族を絶対に実験に使わないと思う」

「ぼくも家族は使いたくないけど、青洲だからつかったと思う」・・・S

「でも、家族やったら頼めるけど、他の人に頼めない」

「ぼくは、他の人にしか頼みやすいと思う」

「わたしも、他の人にしか頼みやすいと思う」

「だから、お金を渡して実験台になってもらっているんや！」

「でも、青洲はそんなこと考えたかなあー？もし、先生が加恵さんだったら、他の人に頼むのは
いややなあー」・・・Teacher

「青洲も加恵さんも、チョッとでも早く麻酔薬を完成させたかったはずやから必死だったと思う」

「青洲の家は、あんまりお金なかったから、そんなこと考えなかったと思う」

「弟子もいてるんやから、弟子に頼むこともできたはずやで・・・」

「青洲のすごい」は何なのかを話し合うことで「ひとりでも多くの病気で苦しんでいる人を助けたい」とい
う青洲の願いに迫らせたいと思い授業を進めた。青洲の生きた時代と現在を同じように考えて意見を言ってい
る子どもたちもいたが、時代背景がはっきりしないまま意見が出てしまっているのが、青洲の生きた時代にタ
イムスリップできるような手立てが必要であった。時代背景を考え自分に置き換えて意見を言えた子どもたち
は、タイムスリップできていると考えるが、この子どもたちの意見を取り上げ、時代背景を考えさせることも
できたのに、取り上げることができなかった。その中で、Sくんは、いつも人とかかわりを考えながら意見
を出している子どもでもある。この学習で、現在医学のことも考えながら意見を出している子どももいて「人を
助けたい、麻酔薬を成功させたい」と願う青洲の思いは、感じ取れている。そして、妻や母も同じ気持ちでい
るということも学習できた。今から200年ほど前に、『人体実験をした』ということが『すごい』というこ
とになったので、授業の最後に、有吉佐和子さんの小説のタイトルが『華岡青洲の妻』であることに触れた。

●おじいさんと出会って

おじいさんと出会って、疑問と感動が残った。母と妻の二人が命がけで実験台になったことだ。自分の家族では考えられないことだからだ。母は、残りの人生を死を覚悟して青洲にささげたといいてもおかしくないが、妻はとても勇敢だと思う。・・・中略・・・

青洲は偉大な医者なので、その子孫も立派な医者になっているのかどうかを知りたい。

●青洲の里見学

青洲の妹たちも青洲の学費のために機織をして働き、京都に学費を送っている。その妹たちのためにも短期間で医学を修得した青洲の精神力はすごい。・・・中略・・・ここに来て、おじいさんが青洲にほれた人への気遣いややさしさが伝わってきたように思う。

●ドクター下間との出会い

ドクターの話聞いて、医者は忙しいと思った。16時間も手術をしてその間は何も飲んだり食べたりできないし、胃や腸を切ったり、切ったのを見たりしなければいけないからだ。でも、僕は、チョッと医者になりたくなってきた。・・・中略・・・青洲も私腹を肥やすのではなく、世の中の役に立つことばかりしているから、ヒマにならず、ご飯が美味しかったと思う。ぼくは、医者のなれなくても、ヒマにならず、ご飯を美味しくなる職業につきたいとドクターの話聞いて思った。

●青洲祭りに参加して

・・・前略・・・やっぱり、練習を重ねていくと、チョッとずつでも上手になっていくのだと思った。・・・中略・・・役者も裏方もみんな力を合わせてがんばり、劇が成功した。1ヶ月間だったけど、とても短く感じた。リハーサルの時は緊張して、本番はもっと緊張した。でも、その時に「ここまでやってきた華岡青洲の集大成みたいなものだから、楽しもう！」という気持ちもあった。何回も言うけれど、本当にがんばってくれたみんなには悪いことをしたという、反省の気持ちでいっぱいだけれど、劇はとても楽しかった。・・・後略・・・

3 今後の課題と展望

子どもにとって会った事のない過去の人々や時代の事柄を理解させるには、その人たちが過ごした時代を知るための教師の資料の用意（ネタさがし）が子どもたちの活動に大きく影響した。

資料を探すために人に出会い、復元された過去に出会い、そこから情報を得て、自分の学習に取り入れる。この体験活動は、子どもたちが教材に近づくための手段であり、体験すること自体が目的にならないために配慮しなければならず、子どもたちの好奇心（興味関心）を揺さぶるために、これらの体験活動が本当に必要であったと考えている。ただ、子ども一人ひとりの様々な疑問を学習目標に沿って集約しきれず、子どもの興味関心の赴くままに進めてしまったこともあり、反省すべき点だと考えている。

それと、『華岡青洲』『南方熊楠』が教材として、このクラスの子どもたちに適していたかどうか不安は残るが自分から教材に向かって、どんどん活動を進めていくことができた子どもたちには、楽しい学習になったと思う。残念ながら、過去にたどり着かない中途半端な知識だけの学習で終わってしまった子どもには、難しい内容の学習であったかもしれないが、この時の体験学習が体に残り、この学習が子どもの未来に役立つと信じたい。

4 実践研究テーマの設定

『みらいの時間』は、クラスの子どもと共に考え、子どもと共に学習を進めていると実感できる学科である。また、子どもにとっても自分たちが研究したことを価値あるものとして残したり、伝えたりしていくことを、活動を通して正に自分たちの学習を自分たちで進めていると実感できる。今後も、子どもたちと進める学習を確立するために、教材研究の視点を明らかにしながら、子どもと共に学習を進めて行きたい。